

# 千三百年近く存在してきた信仰の地

## 龍燈伝説と関伽井嶽 特集

### 常福寺のこと

西暦七三四年(天平六)、奈良の鷲峰山で修業をしていた源観上人が、水石山山頂近くにある剣ヶ峰に入った。東北地方で大地震があり、疫病が流行って人々が苦しんでいると聞き、「救いたい」と思った。インドから唐に入った高層・善無畏ゆかりの薬師如来像を持ち、剣ヶ峰に草庵を建てて三十七日間祈り、写経を続けた。すると疫病が収まったと伝えられている。

その七十二年後の八百七年(大同二年)、徳一が剣ヶ峰に詣でた。かなりの人が参拝しているのを見て、「ここは参拝には適さない」と、現在の関伽井嶽に移した。徳一は前年に筑波山からいわきに入り、翌年までいて会津に移動したと思われる。

### 常福寺ではこれまでに四回、火災に遭っている。近

いところでは一八七八年(明治十一年)二月に護摩札所から火が出て、七堂大伽藍を全焼した。さらに一九三三年(昭和八)十一月、たき火の火の粉が山門の茅葺き屋根に燃え移り、庫裡などつながっていた建物がすべて燃えた。唯一残ったのが、少し離れていた奥の院だった。仏像などはすべて運んだので、無事だった。

その後戦争が始まり、復興は至難を極めたが、二十年後の一九五三年(昭和二十八)にやっと本堂が完成し、不動堂、鐘樓堂ができて上がるまで、四十年の歳月を費やした。

### 関伽井嶽と赤井岳

関伽井嶽の「関伽」とは

仏様にお供えする水のこと、サンスクリット語の「アークア」が語源、と言われている。薬師堂の左下にある弘法水は、眼病に効く霊水として、あがめられている。寺ではかつて、「薬王丸」という薬も作っていた。

赤い毛のイノシシ伝説から来ているのが「赤井岳」。石城国造 建許呂命はイノシシが悪さをして農民たちを困らせていると聞き、討伐するためにやって来た。建許呂命が、赤毛のイノ

## いまも残る長久保赤水の碑と燕石

### 龍燈伝説

龍燈現象には、どうして龍燈が起るようになったのか、そのいわれ、伝説が常福寺に残っている。

赤井に住む龍の化身である若者が町娘に恋をした。薬師如来に「一緒にになりたい」と願うと「お前は龍だから、それはできない」と言われてしまう。若者は娘を奪って竜宮へ行き、姫とされた。歳月が経ち、姫が難産で苦しんでいると、薬師如来が助けて安産させた。その礼に龍燈が献じられるようになり、四倉海上、仁井田浦から夏井川を通じて光が廻り、孤立する龍燈杉の梢で強い光彩を放って、

シシを発見して矢を射ると脇腹に突き刺さったが、小川方面へ逃げてしまった。さらに山頂付近まで追い詰めて二の矢を放った。イノシシが息絶えたのでその鼻を切って農民に見せた。その場所が、現在の北好間猪ノ鼻だったことから、この地名がついた、と言いつた。

さらに建許呂命が陣を張ったところが榊小屋。二本目の矢を放ったところが二ツ箭山、見事にイノシシを

水は一七五三(宝暦三)に、仙台石に漢文を刻んで龍燈碑(約1m)を建てた。内容は龍燈の印象記ともいえるもので、書は赤井の柏原方路(まさむね)が書いた。

現在の関伽井嶽の常福寺周辺を散策すると、龍燈の最終地点の龍燈杉、さらに見物ポイントの燕石、赤水の石碑が残っている。龍燈杉の樹齢は千三百年と言われ、「いわき市天然記念物」の白杭を目印に下っていくと、大人が三、四人いないと囲めないほどの巨木がある。生命感に溢れていて、迫力がある。

赤水の碑は境内入口の手前30mほどの茂みのなかにあり、かつてはそこに龍燈場があった。燕石は道路を

討伐して、祝宴を上げたのが大利だった。「赤井岳」は赤毛のイノシシの「赤猪岳」から来ているという。

関伽井嶽の参道は、表が赤井の岳下から登る道、さらに好間の猪ノ鼻から。これは七曲りと呼ばれ、距離は短いのが勾配がきつい。このほか、小川、大利の成沢、三和の合戸などがある。

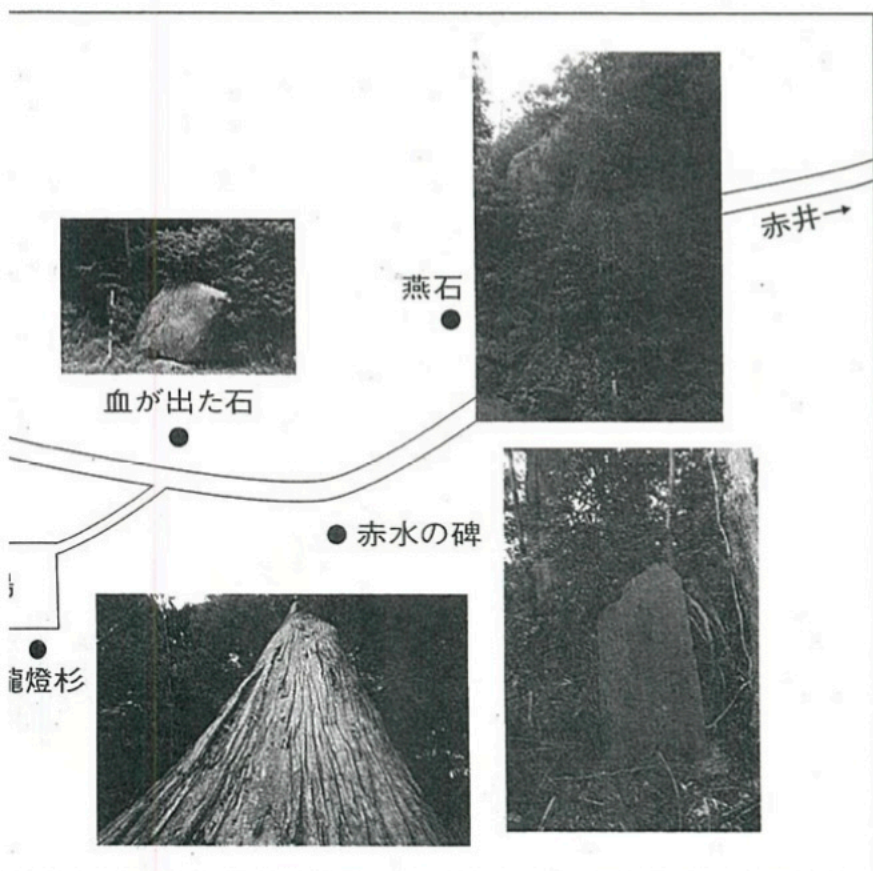
いまは山歩きがブームで、関伽井嶽周辺は「いわき七峰縦走コース」に組み入れられているところもある。

### 観光地として

龍燈が見られたところの関伽井嶽は、多くの人でにぎわっていた。龍燈は暗くないと見えないので、宿泊する人が多かった。境内には曲がり屋のような茅葺き屋根の宿泊施設があり、その写真が残っている。馬を繋いでおく施設もあった。一八九六年(明治二十九)には常福寺が出した龍燈に関する印刷物があり、夏井芳徳さんは「そのころまで、龍燈が見られていたのではないか」と推測する。

また、その九年後に出た「警城平案内」には、「平から関伽井嶽下まで、人力車が往来」と記されている。

赤水のふるさと、高萩にある石灯籠にも、関伽井嶽までの距離数が刻まれている。さまざまな土地から関



燕石

赤井

赤水の碑



龍燈杉

